

“美しい村,,智頭町 ～宿場町と伝説の集落と～

日本不動産研究所 鳥取支所
不動産鑑定士 向井 伸

1. 町の概況

智頭町は、人口約 8,000 人、面積の 90%以上を山林が占め、杉、檜の産地として古くから知られる林業の町で、中心部は、古来より宿場町として栄えている。鳥取県の南東端で、岡山県と接する県境に位置し、現在も、智頭急行線、J R 因美線、鳥取自動車道により、関西方面、岡山方面からの出入口に当たる交通の要衝である。

2. 智頭宿

中心部にある智頭宿は、主要道であった「智頭往来」の宿場町で、参勤交代で江戸へと向かう鳥取藩の最初の宿場で、藩主の宿泊や休憩の場となる御茶屋や奉行所、制札場が置かれた。現在も古い町並みが残し、この文化的資源を観光に生かして街づくりが行われている。智頭宿には、石谷家住宅、塩屋出店、諏訪神社、諏訪酒造、米原家住宅（非公開）と数々の見どころがある。石谷家住宅は、智頭宿における最も大きな建物の一つで、敷地面積は 10,000 m²、広大な池線回遊式日本庭園を中心に配された部屋は 40、土蔵は 7 を数える。住宅は国の重要文化財、庭園は国の登録記念物に指定されており、様々な様式が調和した豪壮な邸宅は近代和風建築の傑作である。



「智頭町の中心部にある、かつての面影を残す智頭宿」

3. 板井原集落

智頭中心部から北東方の山の中へ自動車です約 10 分行くと、昔へタイムスリップしたような雰囲気のある集落がある。まさかこんな山奥に集落があるとは、という感じで、周囲の山々の間に囲まれた集落は、平家落人の隠れ里の伝説が残る。江戸時代は農業と炭焼き、明治時代は養蚕で栄えたが、昭和 42(’67)年にトンネルが開通して以降、急速に過疎化が進んだ。集落内の 110 棟余の建物のうち、江戸時代に建てられたものもある。現在では、11 棟が使用されており、そのうち居住しているのは冬季は 2 棟、他の季節では 4 棟で、多くの世帯では他の地域に居住し、農作業等のために通っている。

最近になり集落の佇まいを将来へ残そうという気運が高まり、平成 16(’04)年 2 月に鳥取県指定の「伝統的建造物群保存地区」に選定された。板井原の見どころは、古民家群であるが、代表的なものとして、明治 32 年に建築されたかやぶき屋根の「藤原家住宅」がある。その他、六尺道、六地藏、大日堂、向山神社、公民館（小学校分校跡）などがある。また、集落内には築 100 年の古民家を利用したカフェ「野土香」や田舎料理が食べられる食事処「火間土」もあり観光客が多い。

(なお、板井原という地名は、鳥取県内に日野町、鳥取市用瀬町、智頭町と 3 カ所ある。

智頭町の板井原の正式地名は上板井原である。)



「明治期などの古民家が連なる坂井原集落」

4. 最後に

智頭町は恵まれた自然と歴史的文化遺産を生かした素朴で人情味あふれる町で、NPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟して、農山村の景観や環境・文化を守る活動をしている。また、災害時に場所と食事を提供する「智頭町疎開保険」や森の持つ癒し効果に着目した「森林セラピー」等、新たな企画で特徴ある街づくりを推進しており、是非一度訪れたい町である。